或書の反歌一首

二〇二番

泣沢の　神社に神酒据ゑ　祈れども　我が大君は
高日知らしぬ

但馬皇女の薨じて後に、穂積皇子、冬の日雪
の降るに、御墓を遥かに望み、悲傷流涕して
作らす歌一首

二〇三番

降る雪は　あはにな降りそ　吉隠の　猪養の岡の
寒からまくに